㈱ JCBC　取締役社長

小縁 千晴

「私を信じて支えてくれる社員たちは、
私にとって同じ船に乗る大切なパートナーだと思っています」――
そう語るのは『JCBC』でSI事業を牽引する小縁取締役社長だ。
常に顧客に喜ばれる仕事を追求する一方で、
取締役社長は社員に対しても心を配り、大切に思っていることを行動で示している。
良い仕事は従業員満足度なくしては生まれない。
その思いを胸に、社長は日々力を尽くす社員のための環境づくりにも注力。
そうして生み出されたベストな仕事は、多くのクライアント企業の発展を支えている。

（対談記事は 66 ～ 67 頁に掲載）

「私を信じて、支えてくれる社員たちは、大切なビジネスパートナーだと捉えています」

Word Professional

「人生において、万巻の書を読むより、優れた人物に一人でも多く会うほうがどれだけ勉強になるか」

経済学者　小泉 信三

終戦直後から皇太子明仁親王の“教育係”を務め、今上天皇（現・上皇）に大きな影響を与えた人物とされる小泉信三。幼くして父親を亡くした信三は、父親が福澤諭吉の門下生だった縁から晩年の福澤に目をかけられ、幼少期を福澤邸で暮らした。長じてからは『慶應義塾大学』で学び、欧州諸国へ留学。帰国後は『慶應義塾大学』の教授となって、『慶應体育会』テニス部部長を務めつつ、信三宅で学問の話をする『木曜会』を開いて多くの学生と交流を持った。さらに『慶應義塾』塾長に就任後は経営者と交流して他大学の創設に貢献。太平洋戦争において戦況が悪化の一途を辿る中、学校と教育を守り続けた。

博識と決断力を見込まれて信三には大臣などの公職依頼が絶えなかったが、断り続けた。その中で唯一引き受けたのが、東宮御教育常時参与。福澤の「帝室論」などを講義して象徴天皇制の未来を模索し、その礎を築くという大事を成した。尊敬し、生涯のテーマとしていた福澤をはじめ、経営者や学生など年齢や立場に依らず多くの人々と交流を重ねてきた信三。彼の残した言葉は、より高みを目指そうとする人々に優れたヒントをくれる。

システム開発を通じて企業や社会の発展に寄与するITパートナー

システムエンジニアリングをはじめ、システムコンサルティング、システム受託開発、インフラ支援サービスなど様々なITソリューションを通じて、企業の発展に貢献している『JCBC』。今年4月にはSI事業開発センターを新設し、SIer企業としてさらなる飛躍を目指す。そのSI事業のCEOとして舵を取るのが、現場と経営を繋ぐ抜群のバランス感覚を持った小縁取締役社長だ。本日はタレントのつまみ枝豆氏が取締役社長にインタビューを行った。

『JCBC』SI事業拠点で活躍する社員の皆さんを交えて記念撮影。

IT業界一筋に歩み幅広い経験を蓄積 キャリアを買われ新事業を任される

――『JCBC』さんは、幅広いITサービスを提供されている企業だと伺いました。小縁取締役社長は長くこの分野を歩んでこられたのですか。

社会人の第一歩目からこの道一筋にキャリアを積んできました。私は中国出身で、大学卒業後、天津にあるIT関連の日系企業に就職したことが、日本との出会いでした。そこで3年間勤めた後、東京に本社がある大手企業に転職。20年間勤める中でエンジニアから徐々にステップアップしていき、2022年9月まで中国開発センターの統括マネージャーを務めていました。

――責任ある役職を務め、やりがいも大きかったと思いますが、なぜ経営者という道を選ばれたのでしょう。

勤務時代、2013年にはMBAを取得し、現場で実践を積みながらさらに知識やスキルを身につけて顧客対応にも自信がついてくると、自分で会社を経営してみたい気持ちが強くなってきたんです。それで退職し、今後どうしようかと考えていたところ、当社の創業者である吉野会長から『JCBC』が設立10年目を迎えたのを機に、SIer企業（他社のシステム構築を主軸とする企業）としてモデルチェンジをするための後継者としてご指名を受けたんです。会長は古くからの知人で、これも何かのご縁と感じてお引き受けすることに決めました。そして2022年10月に取締役社長に就任し、今年4月に新設したSI事業のCEOとして現場を率いていくことになったんです。

取締役社長　SI事業CEO

小縁 千晴

中国湖南省出身。現地の大学を卒業後、IT開発を手掛ける日系企業に就職し、エンジニアとして経験を積んだ。その後、日本に本社を置く大手IT企業に転職して20年間勤務。その間MBAを取得し、会社経営にも携わった。そうした豊富な経験を買われて2022年に『JCBC』取締役社長に就任。現在はSI事業のCEOとして経営に取り組んでいる。

会社と人を成長させる取締役社長の魅力

事業運営においては、本気・気づき・やる気など、いくつかの「気」を大切にしている小縁取締役社長。若手を含め、社員が続々と増える中、人材育成では取締役社長は特に「気づき」を重視している。そして社員に対して少しでもいつもと違うと感じたり、気づいたりしたことは率直に社員に伝え、すぐにミーティングを開いて話し合うようにしている。

「決してエンジニアを責めているのではないんです。私も若いころエンジニアからスタートし、色んな課題を乗り越えて成長してきました」と取締役社長。その経験談を社員に伝えると、社員も興味を持って耳を傾けるそうだ。そしてお客様に喜ばれる仕事という最終目標に向けて足並みを揃えていく。長年、業界の第一線で様々な経験を積んできた取締役社長だからこそ、社員の心に響く言葉を語れるのだろう。その経験値や、小さな気づきを見逃さない繊細さは取締役社長の強みの一つとなっている。

社員は大切なパートナー 力を合わせて顧客に喜ばれる仕事を

――就任後、気持ちの面で変化はありましたか。

前社で社長の代理を務めていたので経営に挑戦するのは初めてではないのですが、当時は唯一の上司である社長に相談することができました。ですが今回は全て自分で考え、決断しなければなりませんし、会社を任せていただいたプレッシャーは大きいですね。本社は盤石な体制を築いていますが、私が取り仕切るSI事業拠点はまだ稼働したばかり。まずはお客様に安心していただくためにも、システムを深く理解している私自らが営業に出て、「何かあれば私が責任を持ちます」という誠意をお見せするようにしています。

――新事業を軌道に乗せるために、先頭に立ってお客様との信頼関係を一から築いておられるのですね。

お客様はもちろん社員との信頼関係も一からのスタートです。前職では260名をマネジメントしましたが、当社に来た当初は試行錯誤の連続でしたね。意見がぶつかりかけても「対仕事」のスタンスで冷静に話すことで、徐々に理解や信頼をしてもらえるようになっていきました。

――良い仕事を納めたいという共通の目標を見据えて歩んでおられるのですね。社員さんのモチベーション維持のために取り組んでおられることは？

例えば、以前お客様のご予算のご都合で手掛けていた案件の急な終了が決まり、メンバーの士気が下がりかけたことがありました。終了まで後1カ月だからといって力を抜いてしまうのではなく、たとえ1日の契約であったとしても責任感を持って最後まで最高の仕事をしようということ、また今回終了になった理由は予算の関係であって、決して自分たちの仕事が否定されているわけではないと皆をフォローした上で、お客様と今後も続く長いお付き合いを見据えて、皆で全力を尽くしました。

――全力を尽くした充実感は心の財産になりますし、必ず次に繋がると思います。

実際、仕事が終わりに近づきタスクが減ると徐々に手が空いてきます。それは実力あるエンジニアにとって勿体ないことですし、それならば自動化で作業を効率化できるようなお客様にとって＋αになるタスクを、お客様からの指示を待つのではなく自ら探そうと提案しています。こうした私の気持ちは社員にも伝わっていて、皆積極的に行動してくれています。

――私がクライアントなら、ぜひ御社のような企業に依頼したいですよ。スタートを切られたばかりですが、今後の事業運営では何を大切にしていかれますか。

まずは社員です。顧客満足度も重要ですが、それは社員満足度を高め、良い仕事を納めてこそ得られる結果だと思いますから。社員と経営者は雇用関係とは言え、私は皆さんを自分を信じて同じ船に乗ってくれているパートナーと捉えています。頑張ってくれている彼らのためにも良いステージを用意したいですし、絶対に誰も置いていかないという思いが強いです。また単に仕事をするのではなく「気持ちよく」仕事ができるということも大事なので、福利厚生面も充実させていきたいと考えています。

（取材／2023年6月）

After the Interview

つまみ枝豆

「お客様の期待を上回る仕事を目指しておられる一方で、現場の社員さんたちに対してもしっかりと心を配り、ベストパフォーマンスを引き出して求められる以上の結果を生み続けておられる小縁取締役社長。経営者としての才覚を感じました。そんな取締役社長が率いるSI事業は必ず飛躍を遂げられるでしょう。私も応援しています」